

童謡と唱歌どちらがうのか？

加藤 良一 2024年5月31日

子どものころ、きょうだいや友だちと歌いながら遊んだ懐かしい歌の数々、いまだに覚えています。日本の子どもたちの遊びには歌が伴っていました。「ずいずいずっころばし」「結んで開いて」、「かごめかごめ」、「大波小波」などなど、どれもリズムカルで歌詞もわかりやすくできていました。このような遊び唄は「わらべ唄」と呼ばれるようです。

いっぽうで、遊びとは直接つながらないけれど、子どもが学校に上がったらかならず歌うものに「唱歌」があります。いわゆる「文部省唱歌」です。明治から昭和にかけて文部省(現・文部科学省)が編纂した、尋常小学校、高等小学校、国民学校および学制改革後の小学校の唱歌、芸能科音楽の教科書に掲載された楽曲、つまり教育用歌曲の総称が「文部省唱歌」です。

さらに、唱歌とならんで子どもたちに愛唱される「童謡」と呼ばれる歌があります。洋楽文化史研究会を主宰し全日本合唱連盟理事でもある戸ノ下達也さん編著の『〈戦後〉の音楽文化』にいくつかあるコラムのひとつに「戦後の童謡」(熊沢彩子)があります。



子どものための創作歌曲を指す「童謡」の語は、一九一八年の雑誌「赤い鳥」(赤い鳥社)以来、学校唱歌とは異なる「童心」を表現する歌に使われる。そして多くの童謡が「赤い鳥」、「金の星」(金の星社)、「コドモノクニ」(東京社)などカラフルな表紙絵の童謡雑誌から生まれ、当時の新しいメディアであったラジオやレコードによって伝播した。特に作曲家の本居長世と童謡歌手の娘たちのように、作曲家と少女歌手がコンビとなり、演奏会や録音、ラジオで歌を広めることもあった。

戦中には、国策の影響で童謡雑誌の発刊が減衰するが、作曲家が童謡歌手を育て、レコードやラジオで発表するという制作と発表のモデルは、戦中・戦後にも踏襲される。

(…) その後、小鳩くるみ、安田祥子・章子(のちの由紀さおり)など多くの少女童謡歌手が生まれ、彼らを生む土壌となった合唱団が隆盛を見た。(…)

さて、童謡と唱歌は異なるとされていますが、この両者はどこがどうちがうのか、いまひとつわかりにくいところがあると思いませんか。童謡が教科書に載れば唱歌になるということでしょうか。童謡と唱歌は果たしてどうちがうのか、すこし考えてみました。

童謡と唱歌、文部省唱歌

童謡とは「子どもの歌」の総称ですが、一般的には民間で伝承されてきた「わらべ唄」を除き、大正後期以降に西洋音楽を取り入れながら子ども用に作られた歌とされています。

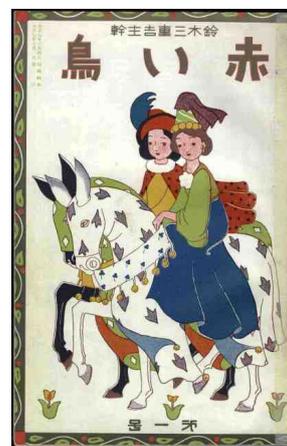
かたや、唱歌は明治維新後に、学校の音楽教育のために西洋音楽を取り入れて作られた歌で、旧制学校の音楽の授業を指す科目の名前であり、そこで教える歌のことも「唱歌」と呼びました。

そのなかにおいてとくに「文部省唱歌」は、明治から昭和にかけて当時の文部省が編纂し、音楽の教科書に掲載した歌のことです。ただ、これは文部省が定めた正式名称ではないということです。

文部省唱歌には「作詞・作曲者」名がなく、「文部省唱歌」あるいは「作者不詳」と記されている歌が多いのですが、それは「尋常小学唱歌」などに収録された唱歌(全120曲)は、全て日本人による新作でしたが当時の文部省は「国」が作った歌であるということを強調したいがために、「作詩・作曲者に高額な報酬を払う代わりに作者名は公表せず、また作者本人も口外しない」という契約を交わしたということです。しかし検定教科書制度になってからは作者名が必要になり、明らかに確認できる場合は作者名が掲載されますが、作者不明または作者名がはっきりしない場合は「文部省唱歌」あるいは「作者不詳」とされたといえます。

そもそも明治時代にはまだ「音楽」という科目名はなく、「唱歌」といったようです。このような時代背景のなか、鈴木三重吉が発起人となって“童話と童謡の児童雑誌”として『赤い鳥』が創刊されました。このとき初めて「童謡」という言葉が生まれました。童謡を担当したのは、北原白秋です。

『赤い鳥』は、大正7年(1918)7月1日に創刊しましたが、昭和11年(1936)8月に廃刊となっています。



童謡を今に伝える日本童謡協会

一般社団法人日本童謡協会は、昭和44年(1969)、初代会長にサトウハチローを迎えて創立され、『赤い鳥』の精神を引き継いで活動している団体です。歴代会長は、サトウハチロー(1969-1973)、中田喜直(1979-2000)、湯山昭(2001-2023)、早川史郎(2023年 -)です。

同協会では7月1日を「童謡の日」として制定し、「年刊童謡詩集こどものうた」で発表された詩に曲をつけて発表するコンサート[童謡祭]、子どもから大人まで楽しめる新しい童謡を募集する作

詩・作曲部門〔ふたば賞〕、こども・ファミリー・大人の3部門で競う〔寛仁親王牌 童謡こどもの歌コンクール〕を開催しています。

童謡の日宣言

私たちは、日本童謡協会の名のもとに、真に子ども達のものとなる童謡の創造と、その普及のために、心を一つにしてきました。

“童謡”は、かつて大正7年7月1日、「芸術として真価ある純麗な童話と童謡を創造する最初の運動」として発刊された雑誌『赤い鳥』が喚起して以来続く、世界に殆どその例を見ない優れた子どもたちの文化所産であります。

激しい社会環境のもとに、ともすれば、真に子ども達のものとは何かが見失われがちな今日、童謡にかける期待は時代の要求となり、新しい飛躍と隆盛が望まれています。

私たちは、この時、“今を生きる子ども達に、今生きる歌を”の主張を全ての人々と分けあい、社会的な運動までに高揚し、さらに大きなうねりとなって広がることを願って、この記念すべき7月1日を、『童謡の日』と制定することをここに宣言します。

昭和59年6月26日

日本童謡協会 会長 中田喜直

<http://douyou.jp/>

作曲家 中野さとみさん ふたば賞受賞

童謡の作詩・作曲部門「ふたば賞」は、日本童謡協会が童謡の普及振興をはかり、広く音楽文化の向上に寄与することを目的として令和3年(2021)創設しました。

4回目にあたる令和6年(2024)の作曲部門において、課題詩「てのひら」に作曲した中野さとみさんの作品が優秀賞を受賞しました。日本童謡協会のホームページに掲載されています。中野さとみさんは、男声合唱団コール・グランツが委嘱した〈合唱とピアノのための民謡交響詩『坂東栗橋感懐』〉の作曲者でもあります。あらためて受賞のお祝いを申し上げます。

Back

「音楽／合唱」TOPへ戻る

Home

「ホームページ」表紙へ戻る